

〈解答〉

- ① 1 こうむ 2 とうえい 3 けいりゅう
4 届 5 観衆 6 高層
- ② 1 そろうぞ 2 工

3 〔例〕実際の年齢よりも若く見られたい（という気持ち。）（15字）

- 4 ウ
5 ア

配点 ② 2～5は各2点、他は各1点 15点満点

〈解説〉

- ① 1 「痛手を被る」は、「大きな損害や打撃を身に受ける」という意味。「被」の音読みは「ヒ」で、「被害」「被服」などの熟語として用いられる。
- 2 「投影」は、「物の影を、ある物の上に映し出すこと」という意味。「影」の訓読みは「かげ」。「かげ」と読む漢字には「影」と「陰」があるが、前者は「光に遮られてできる黒い部分」「水面や鏡などに映るそのものの姿」のことで、後者は「光が遮られて当たらない所」「物の後ろや裏など、遮られて見えない所」という意味。
- 3 「溪流」は、「谷川の流れ」という意味。
- 4 「届」の部首は「尸（しかばね・かばね）」で、同じ部首をもつ漢字には「局」「居」「屈」「屋」などがある。
- 5 「観」と形が似ていて「カン」と音読みする漢字として「歓」「勧」がある。「観」は「みる」、「歓」は「よろこぶ」、「勧」は「すすめる」という意味で区別をする。また「衆」は筆順の問題として出題されることが多いので、正しい筆順を確かめておくこと。

② 6 「高層」は、「空の高い所」「層が幾重にも重なって高くなっていること」という意味。

② 「沙石集」は、鎌倉時代後期に無住という僧が執筆した、全十巻から成る仏教説話集である。ほかの説話集と同様に、因果応報の話や道徳的な話も収録されているが、笑い話や和歌・連歌の話題、また庶民の生活の実態を描いたものまで幅広く取り入れられており、

後世の狂言や落語といったものにも大きな影響を与えた作品である。

1 古文に出てくる語頭以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は、それぞれ「わ・い・う・え・お」に直す。よって、「ふ」を「う」に直す。また、「ア段の音十う」は「子音十おう」と読む（例えば「やうやう」は「ようよう」と読む）という法則に従い、「さう」の部分「そう」に、「らふ↓らう」の部分「ろう」に改める。

2 「西王の阿闍梨」に年齢を尋ねているのは「人」、年齢を尋ねられて「六十に余りさうらふ」と答えたのは「西王の阿闍梨」である。

3 傍線④の直前に「七十と言へるよりも、六十と言へば、少し若き心地して（＝七十歳と言うより、六十歳と言うほうが、少し若くなった気持ちがして）」とあり、七十四歳の西王の阿闍梨が、年齢を尋ねられて「七十歳余り」と答えず、「六十歳余り」と答えたのは、「年老いると実際の年齢よりも若く言いたい」、「本当の年齢よりも若く見られたい」という気持ちがあったからだと筆者は述べている。

4 傍線⑤「本意なき」と対になる言葉は、少し前にある「うれしく」である。お世辞でも「実際の年齢よりも若く見える」と言われたらうれしいが、「実際の年齢より老いて見える」と言われたら「本意なき」だという文の流れで考える。

5 イ「お世辞だと気づいて、がっかりした」、ウ「話をはぐらかそうとした」、エ「外見を若く見せようと必死に努力をしていた」の部分が、適当ではない。

〔現代語訳〕

西王の阿闍梨という僧がいた。「年齢は、おいくつでいらっしゃいますか」と、ある人が尋ねたので、（西王の阿闍梨が）「六十歳余りです」と言ったところ、（尋ねた人は、西王の阿闍梨が）七十歳余りに見えたので、不審に思って、「六十歳から、おいくつほど余っていらっしゃいますか」と尋ねたところ、（西王の阿闍梨は）「十四歳余っております」と言った。（実際の年齢とは）かけはなれた余りであった。七十歳と言うより、六十歳と言うほうが、少し若くなった気持ちにして、（西王の阿闍梨は）このように言ったのだった。（しかし、これは）人間（であれば誰も）が普通にもっている気持ちなのである。

お世辞であっても、「（実際の）年齢よりも、はるかに若く見えなさいます」と言われるのはうれしいものであり、（反対に）「思った以上に老いて見えなさいます」と言われれば、不安な気持ちになり期待外れに思うことは、すべての人の心なのである。